

アメリカの大学における 2 年生支援プログラム

——『高等教育クロニクル』の記事より——

宮 田 実 (訳)

“After the Freshman Bubble Pops,
More Colleges Try to Help their Sophomores Thrive”
—— An Article from *The Chronicle of Higher Education* ——

Translated by MIYATA Minoru

増加する 2 年生支援プログラム

アメリカの大学 2 年生には悩みが多い。バラ色の 1 年生から課題多き 2 年生になると、不安が彼らを襲う。彼らは専攻を決めたり、その選抜クラスを履修したり、海外留学するかどうかを決めなければならない。更に、インターンシップや就職に関するプレッシャーを感じ、自分がどんな人間なのか、どこへ向かっていくのか、その解答を出さなければならない時期でもある。半世紀前から言われている「2 年生スランプ」に陥った彼らには特効薬が無い。スランプ状態になると学生はやる気をなくし、中には、退学するものも出てくる。2 年生の期間および 3 年生の初めに退学する学生数が、1 年生ほどではないが、多いことに大学が気づき始めた。

440 大学を調査した学生就学率統計協会によると、2003 年に 1 年生として登録した学生のうち 80.6% が翌年 2 年生として登録したが、2005 年秋に 3 年生として残った学生は 70.7% であった。アメリカ連邦教育省の調査によれば、退学する学生のうち、2 年次の退学者数は 1 年次の退学者数の約 3 分の 2 である。

これまでアメリカの大学は 1 年生が大学生活に適應できるように様々なプログラムを用

意して、懸命の努力をしてきた。しかし、2年生に対する大学の支援は弱くなりがちである。最近、多くの大学関係者は、悩んでいる2年生に対する学生サービスが不足していることに気づいた。その結果、小規模の私立大学から大規模の公立大学にいたるまで多くの大学が、2年生が離学しないよう手助けする方策を講じている。

サウスカロライナ大学の1年生生活調査センターは昨年、全米の大学で実施されている2年生プログラムに関する調査を実施し、128例を発表した。同センターが主催した会議で、2年生に対する関心が多く大学の強くなっていることがわかった。

2年生に対する特別プログラムが、ブランダイス大学、南イリノイ大学エドワーズビル校、スプリングアーバー大学、ニューヨーク大学で始まった。また、オルブライト大学、ジョージア大学、ヴィラジュリー大学ではプログラムを検討している。現在実施されているプログラム、例えば、セミナー、合宿、特別な住宅提供、学生相談などはまだ実験的な面もあるが、受け入れられつつある。中には、成功の兆しが見えるものもある。特別プログラムを実施している大学の中には、大学から見放されていると思っていた2年生が特別に注目されていることを歓迎し、離学者数がかなり減少しているところもある。

高等教育と組織リーダーシップ論が専門のアズーサパシフィック大学のローリー・シュライナー教授は、2年生プログラムは単に1年生プログラムの延長であってはならないと警告する。それは「ゆっくりとした離乳プロセス」だとシュライナー教授は言う。同教授は2000年にサウスカロライナ大学リソースセンターから出版された『見えない学生のための見える解決策——うまくいく2年生救済法』の共同編集者である。2年生プログラムは自分の進むべき道を自分で考えさせることが重要だとシュライナー教授は指摘して、こう言う。「2年生になると突然手厚い保護が無くなり、本当の厳しい大学生活が始まるのです。」

コルゲート大学の場合

ダリア・リズクさんは厳しい大学生活が来るのを恐れていた。コルゲート大学の1年生の終わり頃、彼女は不安だった。彼女は「私は本当に1年生バブルの中にずっといたかったのです。すべてが新鮮で、何も決めなくてもよく、とても快適でした。」と言う。1年生の人間関係は単純である。リズクさんは更にこう言う。「初めの数ヶ月は友達を作ってその仲間に入ればいいんです。周りの人と仲良くすればいいんです。友達はみんな同じ寮の近くの部屋の人でした。」しかし、2年生として大学に戻ってみると、1年生の時の友達はどこかに行ってしまって交友関係がなくなる。リズクさんはこう続ける。「2年生に

なったら誰と付き合うかは自分で決めなければならないんです。」

現在3年生のリズクさんは、コルゲート大学の2年生支援プログラムのおかげで、思っていたより2年目が楽だったと言う。2006年に4年目を迎えたコルゲート大学のプログラムは、新2年生にクラスメイトと親しくなれるようなイベントを提供している。年間を通じて実施されるこの2年生支援プログラムは、自分が将来どういう方向に進むべきかといった難しい問題の解決の手助けをする。例えば、学生が専攻を決める際に教員が助言をしたり、キャリアセンターのスタッフがさまざまな職業体験を奨励したりする。また、卒業生を大学に呼んで、2年生に卒業後の体験談を話してもらうこともある。

このプログラムの責任者のラジェシュ・ベラーニ氏はこう言う。「私たちは2年生が成長できるようにさまざまなメニューを用意しています。いろんな悩みを持つことが決して悪いことではないということを伝えたいのです。コルゲート大学がこのプログラムを始めたのは、離学率を下げるためではなく、学生生活の質を高めるためなのです。」この2年生支援プログラムが充実してきた理由の1つとして、アンドリュー・メロン財団からの援助金の獲得が挙げられる。

このプログラムの一環として実施されている夏の読書会への2年生の参加者が増えている。そこでは、マルコム・グラッドウェルの『ティッピング・ポイント——いかにして「小さな変化」が「大きな変化」を生み出すか』やバーバラ・エーレンライクの『ニッケル・アンド・ダイムド——アメリカ下流社会の現実』といった本が討論の材料として選ばれた。

2006年秋からリーダーシップをテーマにした施設で2年生が生活するという新しい試みが始まる。そこでは大学構内に居住する教員が、学生が学内プロジェクトを企画するのを手助けする。また、春休み期間中に、政治や市民運動について学ぶワシントン旅行に参加することもできる。

ベラーニ氏はこう言う。「2年生プログラムの目標は、身近なことをいろいろやってみるということです。私たちはゆっくりと、しかも着実に2年生に対して私たちのメッセージを浸透させるつもりです。」そのメッセージとは、専攻を決めたり、外国留学や職業選択などを、ストレスと思うのではなく、自己探検あるいは自己発見の過程と見てほしいということである。コルゲート大学2年生のクリストファー・ナルティ君はこう言う。「一度に多くのことを決めなければならないと、絶対にいやになりますよ。」

2005年の秋、コルゲート大学では2年生に様々な専攻分野の内容を知ってもらうために様々な学部の教員や3、4年生を交えたパーティを催した。ベラーニ氏はこう言う。「このパーティは堅苦しいものではなく、ソファーに座って、ジュースやクッキーを手にして気楽に話し合うんですよ。」

このような本格的な2年生支援プログラムは私立大学でよく実施されている。その中にはレベルの高いリベラルアーツカレッジや小規模で授業料依存型の大学も含まれる。それに比べると、大規模大学における2年生支援プログラムはあまり多様性が見られない。例えば、セントラルアーカンソー大学やウエスタンミシガン大学では2年生専用の寮を造った。マサチューセッツ州立ブリッジウォーター大学では1年生セミナーに加えて、2年生セミナーを開いている。

必要な過保護政策

多くの2年生支援プログラムはパンフレットやウェブサイトを使って「自助努力」の重要性を説いている。ウィスコンシン州のベロイト大学では、2年生が自己認識力を高められるよう支援する。デンバー大学の2年生支援プログラムは、学生が「自己開発の旅」を歩めるよう手助けする。

現在の大学生の多くはいわゆるミレニアム世代（20世紀の終わりに子供時代を過ごした人々）であり、親の保護を十分に受けて育った。そこで、1年生対策室長のジョン・ガードナー氏は、学生個人に対する対応が2年生支援プログラムの重要な要素のひとつであると言う。大学の中には、新2年生に対して手書きの手紙で相談会等の案内をしているところもある。ガードナー氏は次のように言う。「どんな若者たちが今、大学に来ているかを考えれば、私たちはこのような補助的な、おせっかいな介入をもっとしなければならないのです。2年生支援プログラムは過保護に思えるかもしれませんが、これによって学生はよりよい学生生活を送れるのです。」

ワシントン大学には個人別2年生助言プログラムがあり、5人のスタッフがいる。未だ専攻分野を決めていない2年生に対して電話をかけたり、Eメールを送ったり、ハガキを出したりしている。「できることは何でもやります。」と学部生助言担当のローラ・アビラさんは言う。このプログラムは3年目になるが、スタッフは毎年夏になると3000人の新2年生に連絡を取り始める。アドバイザーが1人1時間ずつ取って履修登録、個人的な関心、将来の希望などについて話し合う。アビラさんはこう言う。「学生が家でテレビを見ている時にアドバイザーが電話をしたりすると学生が嫌がると思っていましたが、実際は歓迎されました。」

現在ワシントン大学4年生のシャノン・ナイジェルさんは、2年生の時に支援プログラムの恩恵を受けた。入学したときは歯科へ進もうと思っていたが、すぐに自分には向いていないということがわかった。彼女はこう言っている。「私は何か新しい方向を求めている

ました。でも、それがどんなものか全くわかっていなかったのです。アドバイザーのアビラさんに相談し、その結果、コミュニケーションと経済学の授業に出ました。そして、経済学を専攻することに決めました。もしあの助言プログラムがなかったら、どうしていいかわからなかったと思います。」

効果が出始めた支援プログラム

大学におけるダーウィニズムは過去のものになった。かつては、学生数がどんどん減っていくことが大学の威厳を示すものであった。教授は学生に「諸君の左右の学生を見ておきなさい。なぜなら、このクラスに合格できるのは3人に1人しかいないのだから。」と言ったものだ。しかし、今や大学は必死になって、学生を保持しようとしている。

2年生支援プログラムを実施している大学のほとんどは、このプログラムがまだ始まったばかりなので、はたして離学率の減少、卒業率の増加に直結するかどうかよくわからない。しかし、アズーサパシフィック大学のシュライナー教授によれば、2000年から2年生支援プログラムを始めた同大学では2年生から3年生への進級率は8ポイント上昇して、88%になった。また、ベロイト大学では、最新のデータである2004年の卒業生の卒業率は2年生プログラムの参加者は87%だったが、参加しなかった者は68%であった。

ベロイト大学で2年生支援プログラム開始当初から行われている研修会は2006年11月に15回目を迎える。行事の少ない2年目にあって、多くの学生がこの合宿を楽しみにしており、参加者数は約半数に上る。3年生のピーター・バータネン君はこう語る。「研修会は2年生同士が再び結束するためにとっても重要なものなのです。夏休み後、みんなばらばらになった時に、仲間との関係を元に戻すのは難しいのです。」この1日研修会は大学近くのジュネーブ湖のほとりにあるホテルで実施される。理想的なインターンシップの見つけ方、大学院へ進学する方法、自己発見法といったテーマに関するワークショップのほか、ダンスのレッスンや夜のパーティが催される。

バーモント州のグリーンマウンテン大学では、ABCテレビが放送したドラマ『ザ・ブレイディ・バンチ』を引き合いに出して2年生の自立を促した。2005年に実施された2年生フォーラムでは、ドラマに登場する父親のマイクと母親のキャロルのおかげで、姉と妹に挟まれて真ん中の子であるジャンが惨めな状況から強さを見出していく話をテーマに討論した。2年生支援プログラムの担当者は、1年生と3年生に挟まれた2年生がジャンのように強くなって、今後の進路を前向きに考えるよう望んでいる。

以上見てきたように、多くの大学が2年生を支援するための方策を考え出し、実践して

いる。しかし一方で、このような2年生支援プログラムが必要としなくなるよう学生が大きく成長してほしいと望む声もある。3年生になると自立するしかないのだから。

(2006年9月8日号)

(Copyright 2006, *The Chronicle of Higher Education*. Translated and reprinted with permission. The complete English-language version of this article is available on *The Chronicle of Higher Education* Website at: <http://chronicle.com>)

訳者あとがき

本稿は、アメリカで発行されている高等教育に関する週刊専門新聞『高等教育クロニクル』に掲載された記事の翻訳である。

今回取り上げたのは、アメリカで本格的に始まった2年生支援プログラムに関する記事である。記者はセアラ・リップカさんである。アメリカの大学でも今や、学生を大学に留まらせることが重要な課題となっている。

日本では18歳人口の減少とともに大学全入時代を迎え、学生確保が困難な大学が増えている。そのような大学にとって、離学者数を減らすことはとても重要な課題になってきている。この記事が、これから離学者対策を講じていく大学の参考になれば幸いである。